
横断歩道

ピースブリッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

横断歩道

【Nコード】

N0290M

【作者名】

ピースブリッジ

【あらすじ】

何の変哲もない道路からある日、横断歩道が、消えた。

この町も宅地化が進み、大都市のベッドタウンとなりつつあります。

どれも似たような一軒家が建ち並ぶ、そんな閑静な住宅街の外れ。そこに、掠れた塗料が僅かに見えるだけの横断歩道があります。車通りも少なく、信号なんて洒落た物はありません。二車線の細い道路には、ガードレールすらありません。ただぼつりと、横断歩道が敷いてあります。

僕はもう長い間、この横断歩道を見てきました。晴れの日も雨の日も。風の日も稀に降る雪の日だって。道路の端にある僅かな白線の内側から、横断歩道に向き合うようにして。座ることも眠ることもなく、ずっと、ずっと、見てきました。そして季節は幾度も巡り、今日はこの横断歩道と向き合って丁度十年になります。

十年と聞くと、区切りが良くて自然と愛着も湧きます。それに今日は僕の命日でもあるのです。いつもとは、心持ちがまるで違います。

もう十年もこの横断歩道を見てきましたが、掠れてあまり見えなにも関わらず渡る人が多いのも、この横断歩道です。

向こうには学校やスーパーなどが密集した地域があります。それを目指して、瞳輝かせる子供たちや、昼過ぎの気だるさを引きずる主婦たちが、この寂れた横断歩道を渡るのです。

今の時間は、通学する子供たちがランドセルや手提げ鞆を持って、意気揚々と渡って行きます。少し肌寒くなったこの頃、衣替えも終わったらしく皆一様に冬服を着ています。でも時に半袖で走り回る子供もいたりして、眺めている僕もどこか暖かな気分させられます。

僕も、真っ黒な冬服を纏い、この横断歩道を渡ったものです。あの日もいつも通りに家を出て、眠たい目を擦りながらこの場所まで

歩いてきました。ただその日は、大型トラックが見えたので、それが通り過ぎるまで立ち止まっていたいました。丁度、今の僕が立っている場所に。今の僕と同じ格好で。

忘れることは出来ません。まるで僕がトラックを吸い寄せているかのように、トラックは綺麗な弧を描いて僕を轢きました。スピードもかなり出ていたらしく、即死だったみたいです。

僕はトラックが近付いてくことに驚いて咄嗟に目を瞑りました。そして次に目を開けた瞬間から、ずっとここに立っています。

「よお、元氣か」

彼と会うのも、これで十回目になります。大らかな僕とは違って、彼は律儀に僕の命日に訪れてくれます。

「死んでる人に元氣か、と聞かれても」

去年と変わらない、乾いた笑い声。初めて会った時も終始笑っていて、彼が死神と聞いた時には、少なからず驚いてしまったものです。

死神とは言いますが、僕は決して彼に悪い印象は持っていません。むしろ、良い人……いや、良い神とさえ、思っています。

加えて、この身体になつてからというもの、会話が出来るのが彼だけなのです。一年に一度、命日に訪れてくれる彼の存在は、僕にとって一つの楽しみにもなっています。

「それにしてもお前、今年で十年になるが……まだ成仏しないのか」この問いには、今までと同じように沈黙と俯きでお返事をします。正直な所、僕ですらここに自分が立っている理由がわからないのです。轢かれてからすぐ、こんな状態だった訳ですから。

ですが、何故かこの死神について行つては駄目な気がして、誘いを断ってきました。また逆に、僕が沈黙と共に俯けば、彼も溜め息一つと引き替えに、あいわかったと諦めてくれました。だからこそ、僕は十年経った今でもここにいます。

でも、今年は様子が違いました。いつもの深い溜め息が、いつまで経っても聞こえてきません。その代わりに、少しばかり沈んだ声

が聞こえてきました。

「今日で、お前はこの世とお別れなんだ。お前がなんと言おうと、無理矢理にでも連れて帰る」

僕は『そうか』と、一人呟きました。

今年はどうやら我が侘も通らないみたいです。ならば、諦めるしかないでしょう。絶対にあの世につれて行かれるのであれば、僕はそれに抗う気はありません。

ですが、この十年の間、僕も何も考えずに過ごしてきた訳ではありません。自分なりに、僕がここにいる理由を考えてきました。

僕には、彼が尋ねてくれること以外にも楽しみがあります。それは、花を手向に来てくれる、彼女の存在です。

彼女は僕の幼なじみでした。物心ついて、気付いた時にはもう仲睦まじくて。お互い両親が仲が良いことも手伝って、僕たちは中学校の初めには既に、保護者公認の交際を始めていました。

事故のあったあの日。彼女は僕の少し後ろにいました。僕が横断歩道を渡らずにトラックが通り過ぎるのを待ったのも、彼女を待とうと思ったからに他なりません。

吹き飛ばされ、道端にまるでマネキンのように横たわる僕を抱きしめて、彼女はずっと泣いていました。救急車が来て、親御さんに引き剥がされるまでずっと、ずっと、泣いていました。

それ以来、彼女はこの横断歩道に花を手向けに来てくれます。初めは毎日。事故から少し経てば一月に一回、最近では一年に一回と回数は減りましたが、命日だけは、必ず来てくれます。

もう事故からだいぶ経ちます。童顔だった彼女も今では大きく成長し、可愛いから綺麗という言葉が似合うようになりました。臍隠かもしれませんが、とても綺麗な女性だと、心からそう思っています。

ただ、僕はそんな彼女が心配なんだと思います。

あれから十年も経ったんです。僕なんて忘れて、新しい人生を歩んでほしいのです。

「私、好きな人が出来たの」

僕が見つめる中、ぽつりと彼女は呟きました。

彼女は生きています。死んだ僕とは違って、生きています。

恋をするということは、とても良いことです。これで彼女は、新たな道へと進めることでしょう。

それなのに、何故僕は泣いているのでしょうか。嬉しいはずなのに、この溢れる涙の意味は何なのでしょうか。

「ごめんなさい」

「そろそろ行くか」

僕に向かって呟かれた二つの言葉両方に、僕は黙って、頷きました。

住宅地の脇にある、寂れた道路。そこにあつたはずの横断歩道はもう何処にも、ありません。

（後書き）

作者のピースブリッジです。拙作を読了して下さい、誠にありがとうございます。

さて、初めて短編を書いてみて、あまりの難しさに絶句。五分は、あまりに短いですね……。この作品は、五分企画に刺激されて、矢も盾もたまらず書いてしまった作品でございます。

それでは、この辺りで失礼します。機会があればまた、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290m/>

横断歩道

2010年10月8日13時40分発行